

## 甲骨文字談義（2）

吉池孝一

甲骨文字に関心を持つ学生と教員の対話です。登場人物の設定は次のとおりです。

佐藤久美：学生。歴史一般に関心がある。

山村健一：学生。入門段階のいろいろな言葉の学習を趣味としている。

安井教授：漢文の教員。いろいろな文字に関心がある。学生とともに甲骨文字の勉強会をはじめた。

### 〈第2回目〉

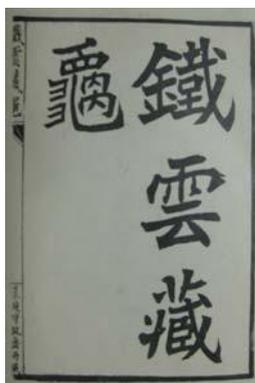
安井教授：第1回の勉強会では、高校の世界史の教科書（『三省堂 世界史[B]改訂版』）にある記述のうち、「一」について確認をしました。今回は「二」について確認をしましょう。

- 一、殷は紀元前 17～16 世紀ごろ建国され、紀元前 11 世紀ごろ周によって滅ぼされた。
- 二、現在の河南省安陽市に殷後期の遺跡がある。1899 年、この付近から文字が刻まれた獣骨や亀甲が発見された。これが「甲骨文字」である。
- 三、殷王は甲骨を用いて占いをを行い、その結果にもとづいて政治を行った。その記録に使われたものが甲骨文字で、漢字の基礎となった。
- 四、占いを行うには、亀の甲や獣の骨の裏側を火で熱し、表面に生じたひびの具合によって吉凶を判断し、その結果を表面に刻み込んだ。
- 五、1928 年以来、大規模な学術調査が行われ、殷の事情が明らかになった。

### 《『鉄雲蔵龜』（1903年）の出版》

佐藤久美：「現在の河南省安陽市に殷後期の遺跡がある。1899 年、この付近から文字が刻まれた獣骨や亀甲が発見された」とありますが、誰がどのように発見したのでしょうか。

安井教授：文字が刻まれた獣骨や亀甲の発見の事情についてはさまざまな説があります。その一面に過ぎないかもしれませんが、わたしたちは『鉄雲蔵龜』という本の序文によって確認をすることにしましょう。この本は、甲骨文字を始めて世の中に紹介したもので、劉鶚（字は鉄雲）という人が 1903 年の 11 月に出版しました。



『鉄雲蔵龜』



拓本



劉鶚

・・・・・・卓上の本を手にとって・・・・・・

山村健一：これが『鉄雲蔵亀』ですね。

安井教授：残念ながら『鉄雲蔵亀』の初版本ではありません。山村君が手にしている本は、1959年に台湾の芸文印書館というところから嚴一萍氏によって再版されたものです。初版本にあった三つの序文のほかに、嚴氏の序文もあります。また、ひとつひとつの拓本の横に模写が付いていて便利です。この模写ですが、『鉄雲蔵亀』初版本にはありません。初版本に付された序文は、その後の甲骨文字研究の出発点となりますので、しっかりと確認をしておきましょう。

山村健一：“拓本”というのは魚拓のようなものですか。

安井教授：魚拓や版画とは違います。魚拓や版画は、現物に直接墨を塗り、その上に紙を置き、バレンなどで実物に塗った墨を紙に写しますから、紙には実物と逆の図柄が写しとられます。拓本は、実物の上に紙を密着させ、そのうえから墨を置いて実物の文字を写しますから、写しとった文字は逆になることはありませんし、実物が墨で汚れることもありません<sup>1</sup>。

佐藤久美：そうしますと、石や甲骨に文字が刻まれているばあい、墨が付かない文字の部分が白く浮き出るわけですね。

山村健一：写真を撮ったほうが正確なのではないでしょうか。

安井教授：拓本と写真、それぞれに長所と短所があるのですが、文字などの細かい資料のばあい、拓本のほうが明瞭に判別できるようにおもいます。また扱いやすいという利点もあります。

山村健一：拓本については分かりました。解説の出発点となる序文には、なにが書かれているのでしょうか。

安井教授：三つの序文のうち、劉鸚自身が書いた序文が大事です。序文には①甲骨片の発見の経緯、②商（殷）の文字と判断した根拠、③解説の手続きが書かれています。一つずつ確認をしていきましょう。まずは①発見の経緯ですね。

山村健一：この劉鸚の序文、なかなか難しいですね。

安井教授：安心してください。『古代殷帝国』（貝塚茂樹編、みすず書房、2001年）という本に日本語訳があります。

佐藤さん、そこにありますからの18ページから25ページまで内容を確認してください。

### 《甲骨文字の発見》

佐藤久美：「亀板は己亥の歳（1899年）に河南湯陰県に属する古牖里城において出土せり。」とあります。

山村健一：教科書（『三省堂 世界史[B]改訂版』）によると、文字が刻まれた甲骨片の出土地は河南省の安陽市とありますが、劉鸚の序文では河南省湯陰県古牖里城となっています。安陽市と湯陰県古牖里城はどのような関係にあるのでしょうか。

安井教授：湯陰県は安陽市の南にあります。別の場所です。それで、湯陰県古牖里城とはなにか、ということですね。簡便な調べ方になってしまいますが、そこに『古代漢語詞典』（商務印書館、2008年）があります。牖里をひいてみてください。

山村健一：はい。牖里は地名で羨里とも書くようです。今の河南省湯陰県の北にあり、殷の紂王が周の文王を捕らえた所とあります。

安井教授：当時、文字が刻まれた甲骨片は高く売れたようで、それを生業にしている人たちは本当の出土地を教えたくなかったのでしょうか。佐藤さん、続きをまとめてください。

佐藤久美：はい。甲骨は己亥の年（1899年）に河南省の湯陰県から出土したと書いてあり、

<sup>1</sup> 拓本の基本については『拓本のすすめ』（内田弘慈著、国書刊行会、1992年）を参照。

その後は、つぎのとおりです。

- 一、その地の人が、土の盛り上がっているのをみつけた。掘ってみると骨片がでてきた。
- 二、庚子<sup>こうし</sup>の年（1900）に骨董商人が百片あまりを王懿榮<sup>おういらい</sup>という人に持ち込んだ。王氏はその価値をみとめ購入した。
- 三、王氏は他の骨董商人からも数百片を購入した。
- 四、その王氏は歴史上有名な「義和団事件」により殉死した。残された甲骨片は壬寅<sup>じんいん</sup>の年（1902年）に劉鶚<sup>りゅうおく</sup>が買いとった。
- 五、その後、劉鶚はみずから甲骨片を収集し、王氏から購入したものと合わせて、五千片ほどになった。そのなかから千片ほど（正確には 1058 片）良いものを選び出して拓本にとり 1903 年に出版した。

安井教授：この序によると、1899 年という年は、ふつうの甲骨片が掘り出された年ではなくて、後に古代文字の資料として価値が確認されることになる文字が刻まれた甲骨片が掘り出された年、ということになります。文字が刻まれた甲骨片そのものは 1899 年以前から出土していたことでしょう。それは人々の目に触れていたはずで、刻まれている文字を的確に評価することができて、それで始めて大きな価値と影響が生じるわけです。

### 《商（殷）の文字か》

山村健一：商（殷）の文字と判断した根拠が書かれているということですが、どうして商（殷）の文字であることがわかったのでしょうか。

佐藤久美：まず祖先の名として「祖乙」「祖辛」「祖丁」「母庚」がでてくる甲骨文の例をあげます。それから「祖乙・祖辛・母庚の如く天干（十干）を名とするを見れば、たしかに殷人たるの確証なり。」と述べます。

山村健一：十干の名を持っているから商（殷）のものだ、といっているようにみえるのですが、王公の名前に十干を用いるのは商（殷）だけなのでしょうか。

安井教授：『史記』によると、「夏本紀」に「帝孔甲」「帝履癸」とあり、夏王の名前に十干は使われています。また、これも『史記』によるのですが、周の「齊太公世家」にも「丁公」「乙公」「癸公」とあるように十干が使われています。もっとも、王公名に対して全面的に十干を用いるのは商（殷）ということになります。

山村健一：それでは、王公名に十干を用いているということだけでは商（殷）の資料だとはいえない、ということですね。

安井教授：正確に言えばそういうことなのですが、ここで大事なのは、劉鶚が「祖乙」「祖辛」「祖丁」を含む甲骨文の例を、この順番で、あげているということです。

山村健一：どういうことでしょうか。

安井教授：『史記』の「殷本紀」に書かれている殷王の系譜によると、祖乙の子は祖辛、祖辛の子は祖丁ということがわかります<sup>2</sup>。劉鶚は偶然に祖乙と祖辛と祖丁の甲骨文の例を提示したのではなく、意図的に直系の王を三人ならべ、『史記』の「殷本紀」の記述と符合することを確認したうえで、甲骨文字資料が商（殷）のものであることを述べた、というわけです。

山村健一：もう少しはっきりと説明してくれればよいような気もするのですが。

安井教授：そうともいえますが、祖乙、祖辛、祖丁と用例をならべれば言わなくてもわかるでしょう、ということです。このように「殷本紀」の殷王の系譜に出土資料の王名を当てはめていくというやり方は、その後、孫詒讓、羅振玉に踏襲され、王国維という人にいたって完成します。孫詒讓、羅振玉、王国維の部分について知りたいば

<sup>2</sup> 「祖乙崩，子帝祖辛立。帝祖辛崩，弟沃甲立，是為帝沃甲。帝沃甲崩，立沃甲兄祖辛之子祖丁，是為帝祖丁。」

あいは、ここに『甲骨文の話』（松丸道雄著、大修館書店、2017年）という本があります。この本の「殷代王室の世系」に書いてありますので読んでおいてください。

### 《解説とは—その1》

山村健一：劉鶚の序文には甲骨を解読する手続きも書かれているということですが、そもそも“解読”とはどういうことでしょうか。

佐藤久美：いま、『岩波国語辞典』の“解読”の項目をひきますと、“わかりにくい文章や暗号などを読み解くこと”とあります。広い意味でつかわれていますね。

安井教授：言語学的解読については『言語学大辞典 第6巻 術語編』（三省堂、1996年）に説明があります。それによると、言語学的解読は、主として未知の古代文字あるいは古代言語を読み解くことに限定して用いられ、つぎの3つのばあいが想定されるということです。

- 1) 文字と使用言語が、ともに不明な場合。
- 2) 文字は不明だが、使用言語は推定できる場合。
- 3) 文字は判明しているが、使用言語が多かれ少なかれ不明な場合。

エジプト象形文字（聖刻文字）や古代ペルシアの楔形文字は第2のようです。

佐藤久美：シャンポリオンによるエジプト象形文字（聖刻文字）の解読や、グローテフェントによる古代ペルシアの楔形文字の解読は有名ですが<sup>3</sup>、東アジアにおいて解読を必要とした文字というと、どのようなものがあるのでしょうか。

安井教授：契丹文字、西夏文字、女真文字があります。西夏文字は、表意文字で、未知の文字。女真文字は、表意文字と表音文字が混合したもので、やはり未知の文字。契丹文字には、契丹大字と契丹小字の二種類があります。契丹大字は、表意文字を主体とした文字といわれ、漢字をそのまま利用したり、漢字を変形したりした文字が含まれますので、既知の文字と未知の文字からなるといえます。契丹小字は、表音文字が主体の文字で、漢字の筆面を利用しているようにみえますが、未知の文字といつてよいのでしょうか。

山村健一：それぞれの使用言語はなんですか。

安井教授：当初から、契丹語はモンゴル系の言語、西夏語はチベット系の言語、女真語はツングース系の言語と推定されていたので、契丹文字、西夏文字、女真文字についても、解読の種類の第2ということになります。

山村健一：甲骨文字は未知の文字だったのでしょうか。

安井教授：“未知の文字”とは断定しにくいですね。甲骨文字が漢字の祖先であるということは、商（殷）の後の西周の青銅器の文字と比べると一目瞭然ですから。後代の漢字との関係をすぐに推定できるものと、推定できないものがあるようなので、既知の文字と未知の文字からなるとしておきましょう。

山村健一：甲骨文字が漢字の祖先ということは、甲骨文字は表意文字と考えていいわけですね。

安井教授：そのとおりなのですが、ひとこと説明が必要であろうとおもいます。

山村健一：説明といたしますと。

安井教授：甲骨のそれぞれの文字に、対応する漢字楷書体を当てはめると、甲骨の意味を理解することができます。それをもって、甲骨文字は表意文字だということにしていいのではないのでしょうか。

山村健一：それでは、甲骨文字で書かれた甲骨は何語なのでしょう。古代の中国語（漢語）としてよいのでしょうか。

安井教授：解読の当初から、劉鶚をはじめ中国の学者は、中国語（漢語）という前提で甲骨文をみていたようです。また、『新訂 中国語概論』（藤堂明保著、大修館書店、1985年）には次のようにあります。〔動詞＋目的語〕などいくつかの基本的な語

<sup>3</sup> 『解読 古代文字』（矢島文夫著、ちくま学芸文庫、1999年）参照。

の組み立て方からみて「殷代の卜辞の表している太古漢語と、上古漢語・中古漢語および今日の漢語との間には、目立った断絶がなく、3千年間、一貫していることがわかります。」(318頁)。断絶がないようにみえたとしたならば、今日の中国語(漢語)の“祖先”とみていいのでしょうか。もっとも、{目的語+動詞}のような組み立ての文など、“本来”の中国語(漢語)の語順と異なるものもあるようなので、これをどのように考えるか、簡単な話しではないでしょう。

山村健一：甲骨文がその後の中国語(漢語)と断絶がないとして、甲骨文と商(殷)人の話し言葉との間に断絶はないのでしょうか。

安井教授：書き言葉としての甲骨文と、商(殷)人の話し言葉とが異なっていた可能性はないのか、ということですね。たしかに、『日本書記』が中国語(漢語)で書かれているからといって、当時の日本人が中国語(漢語)を話していたということにはなりません。書き言葉と話し言葉が大きく異なっていることはめずらしくありませんね。現在の内蒙古では、学校や公式の場では中国語(漢語)を話すが、家庭内や仲間うちではモンゴル語を話すというバイリンガルのばあいもあります。もっとも、こちらは共に話し言葉ですが。

商(殷)人の言語と甲骨文がしめす(暗示する)言語とのあいだに本質的な差異があったとしても、そのようなことがわかる具体的な言語資料がでてこないかぎり、山村君の想像は保留しておくしかありませんね。とりあえず、甲骨文自体がしめす言語特徴、それは後代の中国語(漢語)と目立った断絶はないというものです。それを出発点として話を進めるしかありません。

山村健一：甲骨文自体は、その後の中国語(漢語)と断絶がないという前提で解説がすすめられたということですが、そうしますと、甲骨文は言語学的解説の3つの類型のうちの第2「文字は不明だが、使用言語は推定できる場合」としていいのでしょうか。

安井教授：3つの類型のうち、いずれかといえば、第2が近いということではないでしょうか。

## 《解説とは—その2》

佐藤久美：未解説の文には、表意文字を使用したばあいと、表音文字を使用したばあいがあるということですが、未解説の文が目前にあったとして、それが表意文字で書かれているのか表音文字で書かれているのか、それとも表意文字と表音文字の混合なのか、どのように見分けるのでしょうか。

安井教授：ローマ字(単音を表す表音文字)で書かれた英語のようなばあいは、数十種類の文字を繰り返し使えば用が足りるはずで、仮名文字(音節を表す表音文字)で書かれた日本語のようなばあいはもうすこし多めの文字が必要になるでしょう。数十種類から数百種類というところでしょうか。漢字(表意文字)で書かれた中国語などのようなばあいは数千種類ということになるでしょう。仮名と漢字が混じった日本語などのようなタイプのばあい、表音文字と表意文字の比率はさまざまですから一概にはいえませんが、数百種類から数千種類というところでしょうか。

佐藤久美：文字の性質の見当をつけたとして、つぎに何をしたらいいのでしょうか。

山村健一：表音文字でも表意文字でも、まずは単語のまとまりを見つけて、単語の意味を推定するという事ではないでしょうか。

佐藤久美：漢字などの表意文字は、一つの文字が意味のまとまりになるからいいとして、表音文字のばあい、意味のまとまりはどのように探すのでしょうか。

山村健一：すくなくとも、繰り返しあらわれる綴りについては、意味のまとまりと見なしているのではないかと思います。そのようにして単語に相当するまとまりを見つけたとして、つぎに、意味をどのように推定したらいいのでしょうか。

安井教授：『インダス文明』(ウィーラー著・曾野寿彦<sup>そのだしひこ</sup>訳、みすず書房、1966年。ウィーラーの初版は1953年)の「インダス文字」の解説部分に、文字の解説に必要な条件として二つあげます。一つは「すでに判っている文字をも含めて二種類の言語で同一の内容が書かれた銘文」の存在、いま一つは「重要な繰り返しの記事のある長い銘文」の存在です。この二つの条件がないためインダス文字の解説はできていない

とします<sup>4</sup>。

佐藤久美：エジプト象形文字の解読のばあい、未解読のエジプト象形文字に、内容が対応したギリシア文字・ギリシア語が刻まれたロゼッタ石が突破口となったようです<sup>5</sup>。たしかに、未知の文字・言語と既知の文字・言語が対応した資料（二言語が対応した資料）があれば、単語の意味はわかるのでしょね。

山村健一：東アジアの未解読文字のばあい、二言語が対応した資料はあったのでしょうか。

安井教授：契丹文字、西夏文字、女真文字のそれぞれに、二言語が対応した資料があります。契丹文字ばあい、碑文や墓誌に内容が対応する中国語（漢語）が付されているばあいがありますが、全面的に対応するわけではなく一部分の対応にとどまります。これは契丹文字の解読が進まない理由の一つです。西夏文字と女真文字のばあいは、共に中国語（漢語）が対応した語彙集があり、これが解読の突破口となりました。

山村健一：甲骨文字には二言語が対応した資料はないのですか。

安井教授：二言語が対応した資料はありません。しかし、それにかわる資料があります。西周以降の漢字です。

中国の歴代において、どのような漢字が使用されたか、その漢字の比較は長い中国の歴史の中で行われてきました。その一例は三国の魏の正始石經（又は三体石經）です。ここに出したものは残石の拓本です（下図参照）。石經の建立は正始年間（240-249年）。歴史書の『春秋』を三種の文字で刻んだものです。

山村健一：3段目の文字は現在の楷書に近いですが、1段目と2段目の文字は、3段目の文字とかなり違いますね。

佐藤久美：いま、甲骨文字と漢字楷書体を対応させた簡便な表と見比べています<sup>6</sup>。それで、右から2行目、上から2つ目は「月」ですが、1段目は甲骨文字の月の字形とほぼ同じです。それから、左から5行目、上から6つ目は「四」ですが、1段目は甲骨文字の四の字形とほぼ同じです。

安井教授：この拓本、上から古文、篆書、隸書となっています。3段目の隸書は現在の楷書とそれほどかわりませんが、2段目の篆書は現在の楷書とかなり異なります。1段目の古文に至っては、楷書との関連を見出すのが困難です。このような資料は、古文がどのような隸書にそうとうするのかを知るための情報を提供してくれます。さらにさかのぼり、古文や篆書が西周の青銅器の文字（金文）のいずれにそうとうするか、という点においても参考となります。その西周の青銅器の文字の字形の中には甲骨文字に近似したものが少なくないわけですから、後代の各種の漢字はロゼッタストーン役目を果たすということになります<sup>7</sup>。

佐藤久美：そうしますと、未解読文字の解読の進め方にはさまざまなパターンがありそうですね。

安井教授：かつて、ポーブという研究者が『古代文字の世界』という本の前文でこんなことを

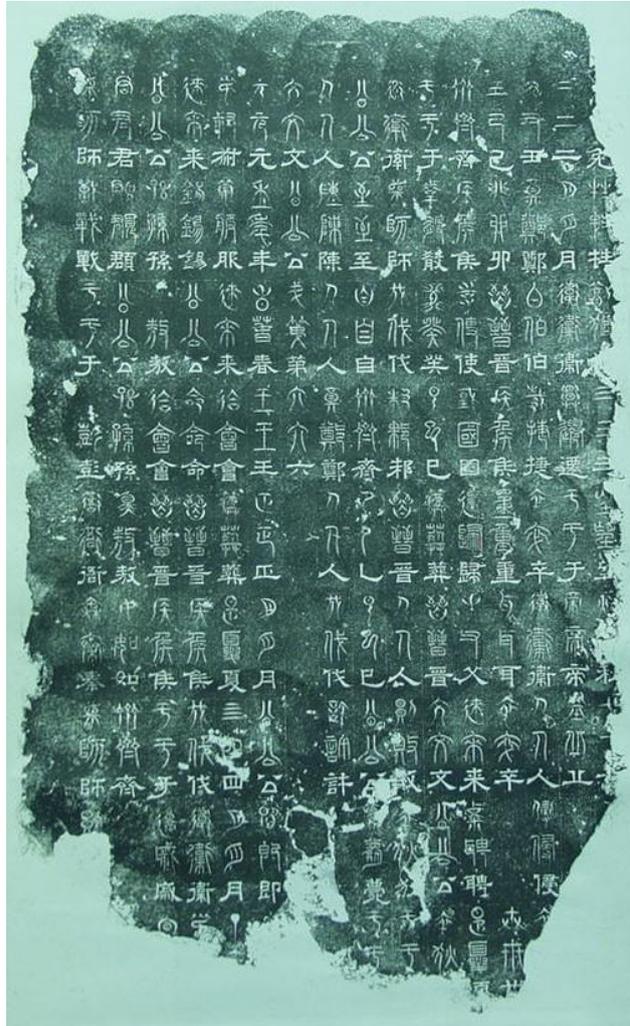
4 土器や印章に彫られたものがあり平均で6語（単位）、長いもので17語（単位）とのこと。

5 『ロゼッタストーン解読』（レスリー・アドキンズ/ロイ・アドキンズ著 木原武一訳、新潮社、2002年）によると、解読に利用できた部分はプトレマイオスという王名の対応くらいであるという。ロゼッタ石という二言語対応資料がはたした最大の役割はギリシア文字ギリシア語の単語数にくらべて、対応するエジプト象形文字の記号の数が少ないことより、解読の対象が表意文字主体の文字ではなく、表音文字主体の文字であることを発見する契機となったことにあるという。

6 「甲骨文字のしくみ」『甲骨文の話』（松丸道雄著、大修館書店、2017年）中の「甲骨文字簡表」。

7 中国の著名な文字学者の唐蘭は、後代の漢字はロゼッタ石よりも信頼性があるとする。『古文字学導論』（唐蘭著、1935年序）下編16葉。『増訂本 古文字学導論』（济南：齐鲁書社、1981年）所収。

いいました<sup>8</sup>。「解読とは門を開くことであり、解釈とはその向こうにある広がりに関わることなのである」と。「門を開く」とはなかなか言い得て妙ですね。未知の文字によって書かれた文がある。その文を理解するための「手続き」は解読の門を開く鍵となる。その鍵を発見しながら読み解いていく。解読の醍醐味は、その手続き（鍵）の発見にあるのでしょうか。



### 《甲骨文字解読の手続き》

山村健一：劉鶚の序文にある解読の手続きとはどのようなものでしょうか。

安井教授：2つあります。1つ目は「[説文の文字構成の原理である] 六書の旨(意)をもって鐘鼎[文字]を推求するに、合わざるもの多し。さらに鐘鼎の体勢(文字)をもって亀板の文を推求するも、また合わざるもの多し。」([ ]と( )は訳者による)です。ここに解読の実践がしめされています。

佐藤久美：「六書の旨」の六書というのは、象形、指示、形声、会意、転注、仮借のことですね。

安井教授：そのとおりです。象形、指示、形声、会意、転注、仮借は漢字がどのように作られているかを、6つの成り立ちから説明したものです。最初の3つは漢字のつくり方

8 『古代文字の世界』(モーリス・ポープ著/唐須教光訳、講談社、1995年)の「まえがき」3-5頁参照。もと1982年刊行。

をしめし、後の2つは漢字の用い方をしめしているといわれています。六書については『説文解字』（許慎著、100年）の序に書いてあるものが有名ですね。このような、文字の成り立ちの原理によって西周以降の青銅器の文字を解明し、解明した青銅器の文字によって甲骨文字の解明に取り組んだ、ということです。言葉をかえていうならば、後代の同系統の文字及びその文字の構造に関する知識を用いて甲骨文字の解読に取り組んだということになります。これが1つ目の解読の手続きです。

佐藤久美：後代の漢字とその構成原理をロゼッタ石のようなものとして用いたわけですね。

安井教授：そのとおりです。2つ目は「亀板はみな残破せるも、幸いにもその卜の繇辞（吉凶を判断する言葉）の文は、本来はなほだ簡単なものなれば、時々、その大略のわかるものあり。」です。

佐藤久美：この一文ですが、占いの文は簡単な構成なのでわかるものもあると述べているだけで、解読の手続きに言及しているようにはおもえません。

安井教授：たしかにこの一文のみでは明確ではありませんね。しかし、先の「祖乙」「祖辛」「祖丁」のときと同様に、ここでも、あげている甲骨文の例が大事なのです。4例あげるのですが、4例ともすべて、{干支+ト+問+問う内容}という文の構造を持つものとして解読しています。この例によってみるならば、甲骨文の基本的な文の形式を理解し、それを提示していることは一目にして瞭然です。

商（殷）人によって書かれた内容は、ほぼ占いに限られており、しかも占いの文は一定の表現の形式をもっていたのです。言葉をかえていうならば、甲骨文の持つ形式の概略を見だし、これを利用して解読に取り組んだということになります。これが2つ目の解読の手続きです。

佐藤久美：{干支+ト}が文頭にくることがわかれば、これだけでも解読は随分とはかどりますね。『鉄雲蔵龜』では、じっさいにどのような解読がおこなわれたのでしょうか。

### 《『鉄雲蔵龜』にみる解読》

安井教授：第127丁の例をあげました（下図）。左側①の文は亀版の中央より縦書きで左に行を追って読み進み、右側②の文は中央より縦書きで右に行を追って読み進みます。劉鶚は序文において、つぎのように解読しました。

① 庚申ト厭問歸好之子（庚申の日にトして再び問う、歸好の子か）

② 辛丑ト厭問兄於母庚（辛丑の日にトして再び問う、母庚に与えんか）

佐藤久美：①②について、現在の解読では、どのようになるのでしょうか。

安井教授：つぎようになります。

① 庚子ト殷貞婦好有子（庚子の日にトして、殷が貞う、婦好は子あるか）

② 辛丑ト殷貞祝于母庚（辛丑の日にトして、殷が貞う、母庚に祝さんか）

佐藤久美：たしかにこのような読みは、甲骨文の一定の形式を見定めて、干支が文頭となることを理解して始めてできることですね。この点は先の第2の手続きによるものと考えていいのでしょうか。また、①②の甲骨文字を、漢字の楷書体に翻字するわけですが、このような翻字が正しいかどうかはべつとして、この点は第1の手続きによる成果とみていいのでしょうかね。

山村健一：文字が刻まれた甲骨片は1899年に発見され、1903年の11月には拓本と序をおさめた『鉄雲蔵龜』が出版された。その序文をみるかぎり、解読の基本的な方向はすでに定まっているようにみえます。甲骨文字は、エジプト象形文字と同様に言語学的解読の類型のうち、第2の「文字は不明だが、使用言語は推定できる場合」に相当するとのことですが、シャンポリオンがエジプト象形文字を解読したときのような、劇的な展開がないようにみえます。

安井教授：エジプト象形文字や古代ペルシアの楔形文字のばあい、表音文字主体の文字の解読であったので、端緒をみつければ“芋づる式”に文字の音が解明され、劇的に解読

が進むこととなります。表意文字のばあい、数千に及ぶ文字を、個別に解明していかなければなりませんので劇的に進展するというにはなりにくい面があります。

山村健一：西夏文字は、甲骨文字と同様に表意文字ということですが、こちらの解読は劇的にすすんだのではないのでしょうか。

安井教授：西夏文字のばあいは、発音や意味を記した西夏語の字典が複数あったため、短日月のうちに解読がすすんだようです。

佐藤久美：甲骨文字は、解読の種類の第2に相当するということですが、「文字は不明だが」という表現は適当なのではないでしょうか。少し腑に落ちません、「不十分ながら、文字も使用言語も推定できる」といったほうがいいのではないのでしょうか。

山村健一：その点は同感です。甲骨文字の解読において、これこそ解読、というような劇的な転開はなかったのでしょうか。

安井教授：劇的かどうかわかりませんが、一つ重要な出来事をあげるとしたら、貞人（<sup>ていじん</sup>占いをつかさどり、問を発する人）の発見ではないのでしょうか。さきに、『鉄雲蔵龜』序の解読と現在の解読について比較をしました。序の「厭問」（再び問う）は、後には「殷貞」（殷が貞う）と読まれるようになります。「貞（問）」の直前にはさまざまな字が1字置かれるのですが、序はそれを初問、再問など、さまざまな問い方と解釈しました。ところが、『鉄雲蔵龜』の出版から28年の後に、董作賓という学者が「大龜四版考釈」（1931年）という論文で、「貞（問）」の直前の1字はさまざまな貞人の名であるとしました。これは現在では定説となっています。この貞人の発見によって、甲骨文字の学問は大きく進展したようです。今回はこの点について、確認をしましょう。

